

# わたしの「春」の回顧録

koberyo1

わたしが実際に使ったわけではないが、小学生の一年生の学校の読本は、大正七年より昭和七年まで「ハナハト」を使用したという。昭和八年からは色刷りとなり、――二年生まれのわたしにとってはずいぶん懐かしいものだが、――「サイタ、サイタ、サクラガサイタ、ススメ、ヘイタイ、ススメ」になった。

わたしはだから、ちょうど色刷りの読本を使い始めた最初の世代となったのである。

さて、子どもだった当時の「春」を回顧するのであった。昭和のはじめ、春ともなれば我が学び舎や校庭に、文部省唱歌「春の小川」や「春が来た」が響き、あたたかな季節の到来を肌で感じたものである。

学校の前に「木村屋」があり、パンを焼く香ばしいかおりが辺りを漂い、なんともいえない幸福の感情に酔い痴れたものである。

花といえば、まず桜のことが思い浮かぶ。桜は国の花とされている。わたしはあの爛漫と咲く淡紅白色の美しい万朶（ばんだ）の枝が好きで、自室にも桜の写真を飾っている。本居宣長が「しきしまのやまと心を人間わば朝日に匂ふ山桜花」とも詠んでいる。

わたしに限らず日本人の多くは古くから桜の花に対し、独特の感情を抱いてきた。桜を季語に歌を詠み、季節のめぐり、移り変わりを文学に託し、肌で感じてきたのである。

ちなみに英語で「春」をあらわす「spring」には、「バネ、飛躍、泉源」などの意味もあり、動詞として「跳ぶ、踊る、湧き出る、生える」とか、あと「急速に出現する」といった意味あいもある。

もう半世紀以上のむかしになるが、わたしが中学生のころ、詠んだ俳句がある。わたしが庭に植えた三つ葉について文士気取りでつくった句を恥ずかしながら紹介することにしたい。

春の芽をそっと出したる三つ葉かな

また、当時の早稲田実業には兵器庫があった。その兵器庫となった小屋の中に、三八式歩兵銃が多数ならべられていたことを記憶している。

その兵器庫の斜め前に桜の木が一本、あった。誰が作曲したのかは不明だが、軍歌に「歩兵の本領」がある。

万朶の桜か襟の色花は吉野に嵐吹く大和男子と生まれなば散兵凌の花と散れ

これは陸軍歩兵の軍歌である。戦前の早稲田実業でも軍事訓練があり、隊列をくみ、歩調を合

わけて行進しながら指揮官は軍歌、「歩兵の本領」をうたい、我々もすぐそのあともつづけて声を揃えてうたったのである。それが兵器庫の桜の記憶とあざやかに結びつくのである。

そしてわたしは早稲田実業で四年間、勉強したのだが、節目の時がやってきた。というのは入学して四年目の春、甲種飛行予科練習生、すなわち「予科練」に十七歳で受験し、合格してしまったのだった。両親は当然のことながら合格を望んではいなかった。ここで早稲田大学への入学を諦めなければならなかったし、若気の至りではあったと思うが、「人間いたる所に青山（せいざん）あり」とその時の社会風潮に乗り、遅れまいとして予科練に志願したのだと、いまとなって思えるのである。そうして海軍から採用通知がやってきて、わたしは入隊したのだった。

「ハナニアラシノタトヘモアルゾ「サヨナラ」ダケガ人生ダ」

（井伏鱒二「厄除け詩集」）

この句の意味するところは、桜が花を開いた時に限って嵐がきたりするものだ。だから、物事にはすべて別れがあるのだから、今のこのひと時を精一杯大切に生きて、という意味が含意されているように思う。

そして予科練では、神奈川県にあった「横須賀通信学校」に入隊する（現防衛大学校）。

この学校の近くに衣笠山公園があり、今でもある。ここは三浦半島のほぼ中央に位置しており、標高は130メートルの小高いところである。この地に日露戦争戦勝記念として桜の樹を二千本あまり植樹したのだった。

予科練にいた時代、わたしはしばしば桜をここでめでたことを思いだす。清楚な蕾や薄白い花に心を打たれ、それが厳しい予科練の日々を耐え抜く原動力となったものだった。

参考資料「名言・名句に強くなる」世界文化社発行